

2023 口語詩句賞総評

西舩 かずよし

今年の口語詩句賞は例年以上に入賞者と選外になった人との点差がわずかであった。一因としては異なったジャンルの選考委員による選ということがあるかもしれないが、それ以上に投稿者の水準があがってきているということがあると思う。自薦10作品という応募の方法に変更となったのは2020年からであるが、応募する作品を自身で、選び、ならべて提出するという方法において、各々の書き手がかなり工夫している様子がうかがえ、それが作品全体の水準の向上にもつながったのだろう。

私が選んだ人で入賞しなかった人もいるし、選ばなかった人で入賞した人もいる。だから選外になった人には言っておきたい。選外だったからといってすぐに書き手としての適正がないなんて思わないでほしい。自身の表現方法を信じて書き続けてほしい。そして入賞した人は素直に喜んでほしい。少なくともより多くの選考委員の支持を得たのだから。こうしたことから、いつもは新人賞や奨励賞に入賞した書き手を中心に総評を行うことが多いのだけれども、今回はそうでない方の作品についてもふれたいと思う。

まず全体をとおしての印象であるが、今回の入賞の決定にもっとも影響したのは、10作品全体のまとまりであったように思う。それが如実に表れたのが新人賞を受賞された「吉沢美香」さんの作品であった。どの作品も、他の作品を邪魔することがなく、連作として読むことが可能なほど、まとまっていた。それはある意味、書き手の成熟を示すものではあるが、一方で、その点にのみ評価の力点を置いた場合、作品としては荒削りだけれども光るものを持っている書き手を見落としてしまう可能性を孕む。そのことを今回の選考ほど感じたことはない。私見ではあるが、惜しくも入賞を逃した「さいう」さんの作品については、みずみずしい感受性が感じられたし、応募作は入賞してもおかしくない水準にあったと思う。また、「立花ばとん」さんの作品についても、新たな表現への試みという点で非常に興味深かった。その他、10作品全体のバランスという点から、私は選ばなかったのであるが、「大嶋碧月」さんの作品からは、日常をひっくり返すような爆発力が感じられた。

選外の方の評がつづいたが、次に、入賞された方のなかで、特に気になった書き手についてふれたい。まず、新人賞を受賞された「吉沢美香」さんの作品であるが、全体からは透きとおるような静けさと静謐さが感じられた。また、「白野」さんは、棘のささった痛みのようなものを呟くようなかたちで作品に表現しており、その淡々とした語り口に魅力を感じた。そして「長谷川柊香」さんであるが、「吉沢美香」さんの作品が静けさを指向しようとしているとするならば、この人の作品は沈黙を指向しようとしていると言ってもいいかもしれない。ことばで沈黙そのものを表現するという困難な試みに、敢えて挑戦されていることに感心するとともに、勇気づけられる思いがした。

ここまで今回の選考についての印象を書かせていただいたが、最後に、特に私が惹かれた作品の紹介させていただき、この評のしめくくりにしたいと思う。そして、改めて、こうして皆さんの作品に出会えたことをうれしく思う。

Samen の単位について考えて
（滴）と決めたから傘を閉じる

大嶋 碧月

カントリーマアムのない味を
言い合って言い尽くしてから
渚になった

白野

おりおんの話をやめて
みかづきが
刺さったままの胸
に、ふれてよ

さいう

まだ雨はおおきな森と答えます

立花ばとん

ガラス片 街灯のもと星になり

花野 木春

クレンジングバーム
ひんやり虫の闇

吉沢 美香

精神科のしろばらすこしきいろ

長谷川柊香

雪のこえ開いたままの解剖図

長谷川柊香